

主体間の社会的・空間的關係から見る きょうどうの場に関する研究 —長野県宮田村における宮田市を対象として—

5218D037-9 細井友美*

地域まちづくりにおいて様々な主体が関わりあいながら継続的に活動していくことが課題となるなかで、行政と住民の協働と住民同士の共同をあわせた「きょうどう」が育まれる場が重要となる。本研究では、多様な主体が関わるきょうどうの場として長野県宮田村において2017年より開催されているまちなかのまちづくり活動「宮田市（みやだいち）」を対象とした。第5回宮田市において主体と場所の観点から開催関係主体の活動や連携及び開催に際して持ち寄られたモノについてヒアリング調査を行い、社会ネットワーク分析により主体間の社会的・空間的關係を明らかにした。主体の活動・モノで見る関係とともに、実行委員会やまちなかを中心とした緊密な関係や一部の主体をハブとした主体の参加が見られた。モノを介した関係で見ると公共空間としての側面を持つ飲食店が中心となっていることが分かった。また、モノの調達に係る行為やモノの種類に着目すると、地産地消の意図や日常生活が反映された伊那市・駒ヶ根市などを含む日常購買圏や、中心的な主体によるテントなどの備品（耐久財）などの貸し借りを通した協働と共同の入り混じるきょうどうの関係が見られた。

Key words: まちづくり, きょうどう, 長野県宮田村, 主体間の関係, 社会ネットワーク分析

1. 序論

1.1 研究の背景と目的

(1) 研究の背景

地域の住民によるまちづくりの重要性が高まるなかで、多様な地域の主体が関わりあい地域づくりを担うことが期待されている。組織が包括的につながる地域コミュニティ再構築に向けて、多様な組織の自主的・自律的な活動や組織間連携・ネットワークの構築が求められ、リーダー的存在や中間支援組織の存在が重要となることが指摘されてきた¹⁾。また、行政サービスの低下など新たな地域課題の解決に向けた地域運営組織の形成が必要として国の支援が行われているが、従来の組織同様に人材・資金・持続性などが課題とされている²⁾。このように、地域における主体において自主的な活動と関わり合いの継続が課題となっている。

羽貝³⁾はこうした主体間の関係を考える際に、共同とは、「互いに顔の見える関係にある複数の人間、すなわち特定多数の人間が目的を共有し、基本的に同じ条件の下に1つの事柄にあたること、あるいはそうした社会関係」、協働とは「多様な地域課題の解決やより質の高い公共サービスの実現を目的とする、住民を構成メンバーとする、自主的・自発的なさまざまな活動主体をはじめ、広く『民』と行政との対等な立場での協力関係」であるとしている。「行政と住民や民間組織の協働」と「住民や民間組織相互の共同」という2つの形をあわせて「きょうどう」と呼び、その重要性を指摘している。きょうどうの観点から住民参加の手づくり公園の事例について述べるなかで、公園づくりを通して公園という場を介した多様な主体のネットワークが形成され、行政や各組織が役割を果たし自発的活動が継続さ

れることにより地域づくりが継承されていくとしている⁴⁾。また、活動の場を対象としたまちづくりの研究では、課題があるなかでも場の存在・価値によって主体の関係や活動が継続していくきっかけとなることが述べられている⁵⁾。公共空間や行事などの多様な活動の場において、その存在・価値によりきょうどうが育まれるきっかけとなる。

地域の自治に関して、藤倉⁶⁾が地域景観を構成する要素及びその管理・活動・所有を行う主体や枠組みの社会構造要素に関して相関構造を示しているように、活動する主体及びその関わり合いと空間とは切り離せないものであり、きょうどうの場も社会と空間の要素から捉える必要がある。また、地域の主体という社会的要素に着目するうえでアクター・ネットワーク理論が参考となる。ラトゥール⁷⁾は、人や組織などの社会的枠組みをもとに社会を捉える矛盾に対して、動的な社会において人に限らず政策や言説・物質・自然など世のなかのもの全てが関連しあうネットワークの結節点であると捉え、その生成的な連関をたどることにより社会を切り取り記述する視点を示している。建築の分野では能作⁸⁾がこの考え方を援用し、建築を構成するものの連関を問い直し物質を介した意味や由来などのつながりを見えやすくする試みを行っている。地域まちづくりの場においても、場を構成するものからつながりを捉えることにより、人や組織などの社会的な構造から浮かび上がらせることができる関係にとどまらず、絶えず変化する場を形づくる社会的な関係をより深く捉えることができると考えられる。

長野県上伊那郡宮田村では、中心市街地を介して多様な主体が参加する定期市を目指し、2017年より「宮田市（みやだいち）」が開催されている。2019年10月に実施された第5回では中心的な主体の緊密な関係によりイベントが実

施される一方で、新たな取り組みを介した主体の参加も見られている。宮田市という場を共有して形成される地域の主体のネットワークが、今後のまちづくりにおいても続いていくことが考えられ、宮田市を取り巻くきょうどうの実態と場のひろがりを知ることが今後の宮田市の地域コミュニティと景観について論じていくうえで重要となる。

(2) 研究の目的

以上の背景より、本研究では宮田市開催に関わった人や組織について（以下宮田市関係主体と表記する）、社会的・空間的観点から関係の構造を明らかにすることを目的とする。そこで、①関係主体の活動や連携、②宮田市開催に際して関係主体により持ち寄られたもの（以下「モノ」と表記する）の2つの観点から、ヒアリング調査によって主体と場所のつながりを調べる。2つの観点から見た社会的・空間的な関係の構造を社会ネットワーク分析により明らかにし、その比較を行う。

宮田市というきょうどうの場において、組織論的な主体の関係に加え、場を構成するモノを介して見える社会的・空間的なつながりも含めた主体の関係の実態について考察することで、今後の宮田村における地域コミュニティの形成と発展に係る議論の一助となることを期待する。

1.2 既存研究の整理と本研究の位置づけ

本研究は、まちづくりの活動・場、社会的関係、空間・地理、ものの取引・流通、社会ネットワーク分析の5つのテーマに関わる。関連する既存研究について(1)～(6)に整理し、本研究で扱うテーマとの対応を表1に示す。本研究は、モノの貸し借りや購入などに着目して宮田市という場を構成するものがつながる主体と場所を調べることにより、網羅的かつ一律な調査によって社会的・空間的な関係を把握することに特徴があり、図1のように、主体の活動とモノのつながりを主体間の関係（社会的関係）と場所間の関係（空間的関係）として把握する。

(1) まちづくりに係る組織や制度に関する研究

まちづくりにおいて組織間連携や活動の持続性に関する研究が行われており、特定の取り組みや組織・施設などを対象に人材や財源などの課題が示されている。水野ら¹⁰⁾は地域内の緩やかな連携を目的としてパートナーシップ協定制度を創設している神戸市において、組織・人材・財源・活動の観点から組織を分類し、まちづくりの段階を考察している。北野ら¹¹⁾は千葉県NPO法人に関して、活動分野・内容とその連関及び活動頻度や場所、運営者の活動意識について調べ、人・空間・活動・時間が相互に関係する地域主体のまちづくり活動の特徴を示している。

(2) ものづくりや公園などの場における主体の活動に関する研究

ものづくりや公園などの場における主体の活動に関して、その持続性を調べた研究が行われている。大垣ら¹²⁾は、子どもと大学生の共作によるちょうちんづくりの活動を対象に調査し、発展・継続の要因として、ちょうちんという「もの」が制作・展示などにおいて魅力的であることなどを挙

表1. 本研究で扱うテーマと関連する既存研究の対応

本研究で扱うテーマ	まちづくりの活動・場	社会的関係(組織・人など)	空間・地理	ものの取引・流通	社会ネットワーク分析
①まちづくりに係る組織や制度	◎	◎	○(活動場所)		
②ものづくりや公園などの場における主体の活動	◎	○(主体間の関係、連携)	○(活動場所)		△
③定期市やフリーマーケット	◎	○(参加者の実態、協働)	○(活動場所)	△	
④景観・空間と社会活動	○(自治の場)	◎	◎		
⑤コミュニティにおける主体の関係・構造	△				◎
⑥ものの供給や取引、物流や流通	△	◎	○(地理的分布)	◎	△

※ ◎: 主題, 研究対象 ○: 研究で扱う範囲 △: 研究で扱われることがある範囲

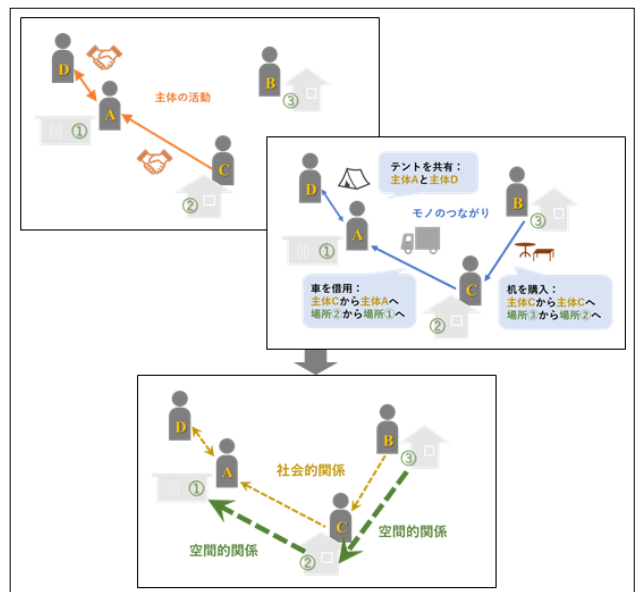


図1. モノの調査による社会的・空間的関係の把握

げている。藤本ら¹³⁾は、住民グループが自主的・継続的に企画・運営プログラムを実施している兵庫県立有馬富士公園において、住民が主体的な活動を行う地域の財産の担い手に育ってきていることや、住民と運営組織との協働が重要であることを考察している。

(3) 定期市やフリーマーケットに関する研究

定期市やフリーマーケットを対象に、担い手とその活動内容・場所などの実態とまちづくりにおける重要性や課題を調べた研究が行われている。藏田ら¹²⁾は趣味の創作活動を対象にヒアリング調査を行い、創作活動の場の段階と各段階における実空間とインターネット空間にまたがる場の拡大、SNSなどによる活動の活発化など手づくりクラフト市場の全体像を示している。また、多様な活動を行う参加者の活動実態やシェア工場の機能を示している。朝倉ら¹³⁾は京都市内の社寺境内地で行われている地域活性化を目的としたフリーマーケットを調査し、商品売買だけでなく娯楽・コミュニケーションの場と認識されることなどから神社という空間の活用の可能性を述べている。また、地域活性化に寄与するためにコミュニケーションの場として多様な主体の継続的な参加を維持する必要性を述べている。

(4) 景観・空間と社会活動に関する研究

空間構成及び空間の利用・管理などの社会的活動を通じ

た主体の関係の実態について調査した、地域の自治に関する実証的研究が行われている。藤倉ら⁷⁾が長野県旧開田村を対象に地域における景観の内的システムについて論じているほか、中内ら¹⁴⁾は、下北沢の商業系街路空間における沿道商店の商品や看板のあふれ出しを巡る地域ルールを対象に調査を行っている。

(5) コミュニティにおける主体の関係・構造に関する研究

主体間の関係の構造を分析する方法に社会ネットワーク分析があり、農林業・漁業関連のコミュニティやまちづくりの組織を対象に研究が行われている。高橋ら¹⁵⁾は農山村集落においてリーダーの社会ネットワーク構造を調べ、情報共有や古老との橋渡しといった、機能を分担する複数名の存在を明らかにしている。萩原ら¹⁶⁾は住民自治組織間の社会ネットワーク構造と組織間信頼の連関を調べ、組織間信頼に影響を与える構造的指標を明らかにしている。

(6) ものの供給や取引、物流や流通に関する研究

ものの供給や取引、物流や流通に関する研究において、地産地消をテーマに農作物などの動きを扱うものや地域通貨に関するものなどと関連がある。例えば、吉野ら¹⁷⁾は地産地消の観点から店頭調査及び地域世帯への実態調査を実施し、産地や入手先との間柄などについて調べている。中里ら¹⁸⁾は、地域通貨の会員間の人間関係構築機能に着目し、サービスや取引量などの実態及び経済効果や人間関係構築効果に関するインタビュー・アンケート調査を行い、取引記録などから地域通貨利用者ネットワークを調べている。

1.3 研究の方法と構成

本研究では、宮田市における関係主体について、主体の活動及び宮田市に持ち寄られたモノの観点から関係の構造を社会ネットワーク分析により明らかにし、社会的・空間的な構造を比較する。2つの観点から見た構造と実態を照らしあわせて宮田市におけるきょうどうについて考察する。調査は、主体の活動とモノに関して各関係主体に対するヒアリングを行い、その結果を整理して宮田市における社会的・空間的要素間の対応を示す。分析は、結果として得たマトリックスをもとに社会ネットワーク分析を行い、構造を明らかにする。研究の構成を図2に示す。

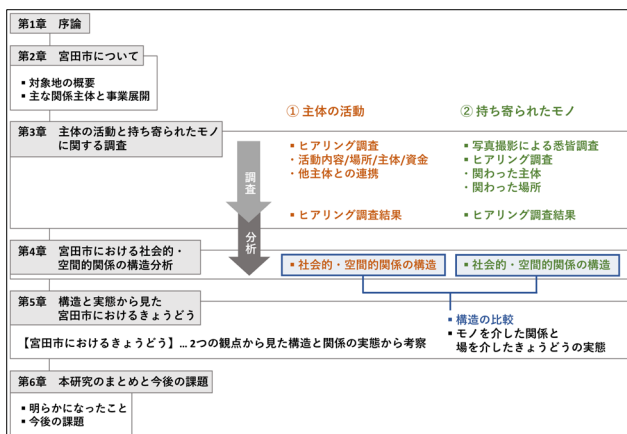


図2. 研究の構成

2. 宮田市について

2.1 対象地の概要

宮田村は長野県上伊那郡の中央部に位置し、北は伊那市・南は駒ヶ根市に挟まれている。総面積 54.50km²、(2016年度末時点)¹⁹⁾、人口 9,017 人、3,459 世帯 (2020年1月1日時点)²⁰⁾である。太田切川左岸の扇状地である平野部と中央アルプス駒ヶ岳に至るまでの深い山地からなり、北東に向かって緩やかに傾斜していた平野部は太田切川と小田切川・大沢川によって開析され、山麓には幾つかの小さな扇状地が発達している¹⁹⁾。

村内には 11 の行政区が存在し、中心市街地にあたる町割には JR 飯田線及び南北の道路網が通っている (図 3)。宮田村は、宮田宿伊那街道沿いの宿場町として本陣が置かれ交通の要衝となってきた歴史を持つ。まちなかには宮田駅や旧伊那街道沿いの商店街、役場などの商業・公共施設が集まり、町家や蔵・水路・著名な祇園祭など文化・歴史的資源が多く残されている。景観計画のなかでもまちなかが宮田宿地域として歴史保全区域のひとつに設定されている。その一方で、商店街において後継者不足などにより空き家・空き店舗が増えており、村全体で定住・移住を進めるほか、まちなかや商店街の活性化・空き家や空き店舗の活用を進めている。

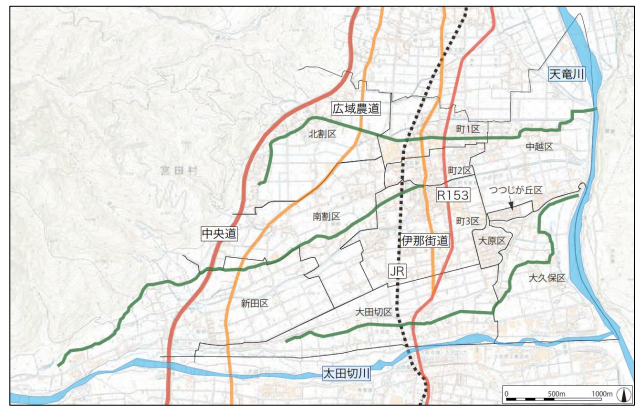


図3. 宮田村の行政区と交通網²¹⁾

2.2 主な関係主体

宮田市は、「宮田村の景観を考える会」(以下、考える会)を中心とした実行委員会により開催されている、まちなかに賑わいを取り戻すためのイベントである。考える会は、宮田村景観計画策定準備にあたり公募村民などで立ち上げた検討組織を母体とし、2015年6月より宮田村のまちなかを中心とした景観まちづくりの活動を行っている。「まちなかを、みる、しる、たのしむ、わかちあう」を合言葉に多様な団体と複合的な事業を展開することにより、「歴史、文化、福祉、賑わいが共存する新しいタイプの中心市街地」の実現を目指している²²⁾。宮田市は、まちなかの魅力を再発見・再構築し人々の交流に資するものとして、それまで

表 2. これまでに実施された宮田市の概要

実施回	開催日時	催し物概要				会場	その他催し物	備考
		歴史展示	会場	ガイドツアー	マルシェ、市など			
第0回	2016年7月16日	まちなか博物館	町2区公民館	まちなか探検ガイドツアー	手づくり商品販売、食品販売	町2区公民館		祇園祭にあわせたイベント 宮田市のまっかけ
第1回	2017年10月29日 10:00~16:00	宮田まちなか博物館	津島神社	みやだ探検ガイドツアー	フリーマーケット、クラフト体験 農産物販売、オープンカフェ	津島神社 アルプス中央信用金庫宮田支店	ハロウィンイベント	
					飲料販売、ハンドメイド作品販売	オヒサマの森		
第2回	2018年5月3日 8:30~14:30	まちなか博物館	津島神社	みやだ探検ガイドツアー	フリーマーケット 農産物販売、クラフト販売	アルプス中央信用金庫宮田支店 オヒサマの森	お宝展・観光案内所	JR東海のイベントと合同
第3回	2018年10月13日 10:00~14:00	宮田まちなか博物館	津島神社	みやだ探検ガイドツアー	飲食物販売、農産物販売、ステージ	商店街	ハロウィンクイズラリー	歩行者天国実施 9:00~15:00
					クラフト体験	津島神社		
					フリーマーケット	アルプス中央信用金庫宮田支店 オヒサマの森		
第4回	2019年5月18日 10:00~14:00	宮田まちなか博物館	津島神社	みやだ探検ガイドツアー	飲食物販売、農産物販売、ステージ	商店街	商店街スタンプラリー	歩行者天国実施 9:00~15:00
					クラフト体験	津島神社		
					フリーマーケット	アルプス中央信用金庫宮田支店 オヒサマの森		
第5回	2019年10月19日 10:00~14:00	宮田まちなか博物館	津島神社	みやだ探検ガイドツアー	飲食物販売、農産物販売	商店街	クイズラリー	歩行者天国実施 9:00~15:00
					ステージ	村民会館（雨天のため商店街から変更）	宮田宿軒下ギャラリー 蔵内外の展示	
					クラフト体験	商店街（雨天のため津島神社から変更）	甘酒配布	
					フリーマーケット	商店街（雨天のためアルプス中央信用金庫宮田支店から変更） オヒサマの森	宮田宿のスケッチワーク ショップ	

宮田村内で別々に活動していたフリーマーケットや考える会が展開してきた歴史展示・ガイドツアーなどの文化的活動を同日に隣接会場で開催することにより、相乗効果を高めるものである。したがって、行政や福祉施設・フリーマーケットなどのテーマ型組織、早稲田大学景観・デザイン研究室など様々な種類の主体が参加している。

2.3 事業展開

宮田市は、2016年7月に中心市街地で行われる祇園祭において休憩場所の提供および展示を行ったことを発端とし、2017年よりこれまでに5回開催された。春秋の定期開催へと定着してきたほか、第3回目以降歩行者天国の実施などイベントの充実と定着に向けた試みが行われてきた。これまでに実施された宮田市の概要について表2に示す。

本調査の対象とした第5回宮田市は2019年10月19日に行われた。会場は主に北側が津島神社境内及び歩行者天国を実施する商店街一帯の伊那街道道路空間、南側が「アルプス中央信用金庫宮田支店」・商業施設「オヒサマの森」であり、会場毎に催し物の特色が分かれている。道路空間上に店出する飲食・物販エリア及びイベントを行うステージエリア、津島神社内の体験・ワークショップエリア、アルプス中央信用金庫宮田支店及びオヒサマの森におけるフリーマーケットエリアを設定し広告(図4)を行った。また、これまで同様の歴史展示を行う宮田まちなか博物館・みやだ探検ガイドツアー・クイズラリー・商店街店舗及びオヒサマの森施設内での店出に加え、新たに蔵の軒下・内部を展示する宮田宿軒下ギャラリー・酒屋の蔵の前で行う甘酒配布・宮田宿のスケッチポイントを探すワークショップを行った。当日は小雨のため、イベント自体は行われたもののフリーマーケット及びステージが中止となった。フリーマーケットの一部出店者が道路空間上に移動し、音響設備を移動してステージで予定されていた一部イベントを村民会館で行った。当日の会場及び来場者の様子を図5に示す。



図 4. 第5回宮田市のフライヤー：(左) 表面、(右) 裏面



図 5. 第5回宮田市の様子(2019年10月19日)：
(左上) 歩行者天国、(右上) オヒサマの森内店出
(左下) 津島神社社務所内クイズラリー受付
(中央下) 蔵での甘酒配布、(右下) 蔵の展示

3. 主体の活動と持ち寄られたモノに関する調査

3.1 調査の方法と概要

(1) 調査方法・実施概要

本研究では、宮田市において関係主体がイベントをつくるために購入・借用などによって用意し持ち寄った商品や備品などのもの（モノ）について扱う。予備調査として本調査の方法を確定するために第4回宮田市についてヒアリングを行い、その後事前調査、宮田市の前日及び当日の調査、事後調査を行った（表3）。

第5回宮田市の本調査において、モノを把握するための写真撮影による悉皆調査の後、関係主体に対して主体の基本情報及びモノに関わる主体と場所について問うヒアリング調査を行った。当日参加した宮田市関係主体及び宮田市を構成するモノに直接関わった主体を対象に、出店・イベントブース毎に調査を実施した。複数人で参加の場合は代表を対象とした。調査の基本的な手順としては、対象者に調査を依頼し、写真撮影・モノの記録を行った。その後、ヒアリング調査を行った。

(2) ヒアリング調査の内容

ヒアリング調査項目は、主体の活動内容及びモノについてである（表4）。関連主体の活動については、既存研究を参考として、活動内容や活動場所などの基本的な情報及び主体間の関係を調べるために他主体との連携を問う質問項目を設定した。また、モノに関しては、宮田市に至るまでの直接的な経緯としてどのような主体・場所との関わりがあるか調べる質問項目を設定した。モノに関する主体と場所に関する異なる種類の関わりを把握するために、宮田市のために購入したあるいは備品として持ち出したなどの状況に応じて、購入店舗や借用先を全て聞き取るようにした。

3.2 ヒアリング調査結果

(1) 主体の活動に関するヒアリング調査結果

宮田市実行委員会には、考える会・宮田村役場のプロジェクトチーム・福祉関係の主体・テーマ型組織などの5主体が含まれ、各々会場内エリア・催し物毎に担当を分け協力して宮田市実施に携わった。関係主体は、宮田村と長野県内近隣市町村を拠点とするもので、出店者は基本的に個人あるいは店舗など主体毎の出店だが、一部では複数の組織・企業などが協力して出店した。宮田市実行委員会のほか、宮田宿軒下ギャラリーで蔵の展示に関わった蔵所有者が3件、道路空間上のテント・車両出店者が15件であった。フリーマーケットはオヒサマの森内のマルシェ出店者が8件、道路空間上の出店者が2件であり、そのほかに木工体験・音響・車両通行止めなどの担当者、オヒサマの森内・商店街店舗内での出店者や催し物関係者が対象となった。

複数のテーマ型組織が長野県地域発元気づくり支援金を活用しており、過去に活用していた組織や運営する複数の組織の各々で活用している人も見られた。

表3. 調査方法と実施概要

	日程と方法	対象	調査内容
予備調査	2019年 8月5日・6日 直接訪問	店舗やテーマ型組織 を中心とした関係主体	本調査の方法確定のため、 第4回宮田市について ヒアリング調査
事前調査	2019年 10月7日～10日 直接訪問	店舗やテーマ型組織 を中心とした関係主体	当日調査を円滑に行うため、 当日に向け準備している内容の ヒアリング調査
前日・当日 調査	2019年 10月18日・19日 直接訪問	全関係主体	モノの悉皆調査（写真撮影）
		フリーマーケットや 施設内出店者を 中心とした関係主体 主催者	ヒアリング調査
事後調査	2019年 10月20日 直接訪問	店舗や主催者	ヒアリング調査
	2019年 10月20日以降 メール・電話	店舗やテーマ型組織 を中心とした関係主体	

表4. ヒアリング調査の内容

ヒアリング項目	内容	
主体の活動	活動内容	普段どのような活動を行っているか
	活動場所	活動拠点
	活動主体	所属/関わる人
	資金	運営に用いる資金、モノの購入資金 ※営利目的の主体以外
	他主体との連携	宮田市に参加した他主体と活動や場所、人材を共有しているか
モノ	主体	貸し借りした主体、購入先
	場所	購入店舗、保管場所

宮田市参加のきっかけは、宮田市開始時からの関わり・フリーマーケットなどへの参加・宮田市において中心的役割を果たす個人からの勧誘が理由となっていた。これらの理由に伴い参加のきっかけとなった主体との関係があると回答する主体があったが、役場機関・テーマ型組織が連携しているほかは、特に連携していない・イベント時のみ一緒になるという回答が中心であった。特に、個人・家族が複数主体として活動し、主体としての区別なく参加していた事例もあり、主体の連携と言うよりも個人的な関係があるという回答が得られた。

(2) モノに関するヒアリング調査結果

モノに関するヒアリング調査結果は、表5に示す凡例に従い整理した。調査を行うなかで、出店形態には、通常営業する店舗内の商品を会場に持ち出した場合、他のイベントにも出店しており同様に持ち出した場合、過去の宮田市も含め宮田市のために企画・出店した場合の3通りがあることが分かった。どの出店形態においても車や設営資材などの自宅からの持ち出しが見られ、テント・車両出店者を中心に食材や商品を提供する容器の購入が見られた。また、宮田市実行委員会と役場機関を中心にテントなど設営資材の借用が見られ、個人宅や施設内倉庫など複数の場所において管理・共有していることが分かった。

モノの関わる場所は宮田村や伊那市・駒ヶ根市が中心であり、問屋やインターネットを利用するなど長野県外・その他の場合も見られた。関わる主体は家や店舗から持ち出した場合の主体自身、購入や借用により関わった宮田市他主体や店舗・個人、インターネットなどが見られた。

表5. モノに関する調査結果の凡例

モノ	分類		場所			主体		※備考
	品目	品名例	分類	エリア	※詳細	分類	※詳細	
1	運搬	車	1.購入	1.自宅	1.宮田村町1区	住所等	1.自身	
2	設営	テント	2.保有/日常	2.店舗	2.宮田村町2区		2.店舗	
3	提供	ケース	使用品の持ち出し	3.個人宅	3.宮田村町3区		3.宮田市 他主体	
4	商品	ラック		4.ネット	4.宮田村北割		4.個人	
5	その他		3.借用	5.その他	5.宮田村南割		5.ネット	
			4.その他		6.宮田村新田		6.その他	
					7.宮田村大田切			
					8.宮田村大久保			
					9.宮田村中越			
					10.宮田村つつじヶ丘			
					11.宮田村大原			
					12.伊那市			
					13.駒ヶ根市			
					14.他長野県内			
					15.その他			

※：わかる場合のみ記載

4. 宮田市における社会的・空間的関係の構造分析

本章では、「UCINET 6 for Windows」を用いて社会ネットワーク分析を行った結果を示す。3章のヒアリング調査結果より、主体の活動とモノから見た関係の対応を表し、関係主体と行政区単位で見た場所の2軸に関して、主体間・主体と場所・場所間の関係を見るマトリックスを作成した。マトリックスを隣接行列に変換して社会ネットワーク分析に用いた。

「netdraw」機能を用いて描画した社会ネットワーク図(図6~11)では、要素がノード、関係が方向性を伴ったリンクとして表される。k-core という指標は全てのノードが最低k個以上のリンクを持つ部分ネットワーク²³⁾であり、持っている強いネットワークの数を示す値として捉え、密度が高い領域を知るために用いる。

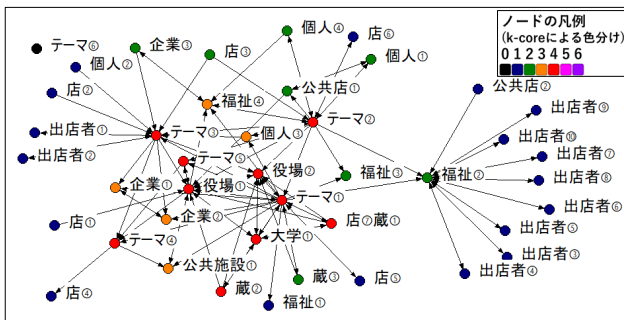


図6. 主体の活動から見た主体間の構造 (k-core)

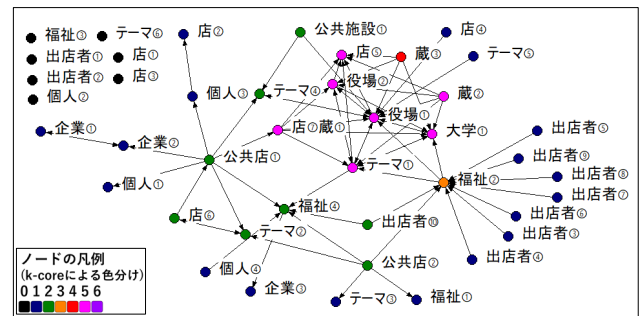


図9. モノを介して見た主体間の構造 (k-core)

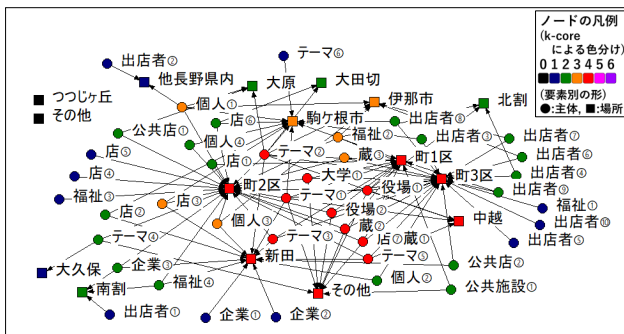


図7. 主体の活動から見た主体と場所間の構造 (k-core)

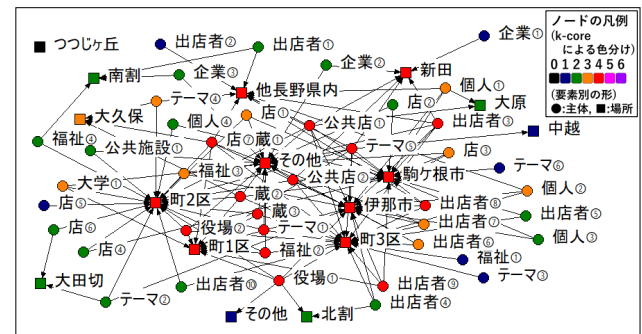


図10. モノを介して見た主体と場所間の構造 (k-core)

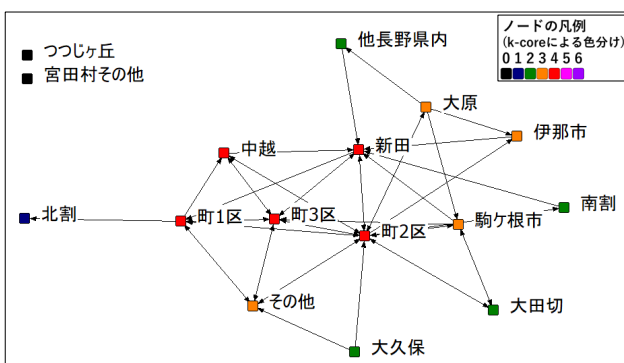


図8. 主体の活動から見た場所間の構造 (k-core)

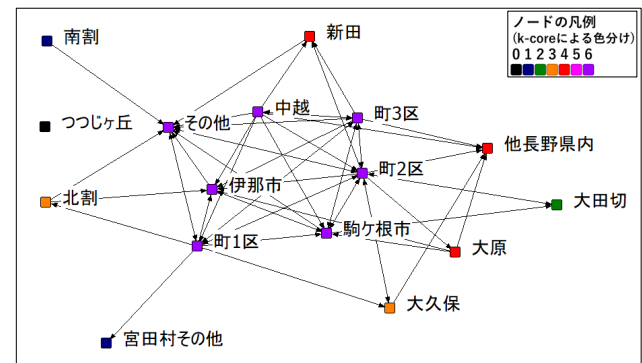


図11. モノを介して見た場所間の構造 (k-core)

分析において用いる主体の名称の凡例と文中に示す主体の概要を表 6 に示す。公共空間としての性質を持つ飲食店は、イベントの会場などとして用いることができる飲食店を指す。特に、公共店①は「まちなか活性化事業」の一環としてまちなかにコミュニティスペースをつくる目的で商店街の空き家を改修しつくられた施設 (MIYADA 村人 TERRACE) である。村内の企業 6 社でつくる一般社団法人が運営し、地域おこし協力隊の活動拠点として曜日替わりで飲食店が出店する 1day シェフなどに利用することができる²⁴⁾。

表 6. (左) 主体の名称の凡例, (右) 文中に示す主体の概要

凡例	主体の種類	名称	活動内容
役場	役場機関	○ 役場①	役場機関 (宮田村建設課、みらい創造課)
福祉	福祉関係主体	× 役場②	役場機関 (宮田村教育委員会)
テーマ	テーマ型組織	○ テーマ①	景観まちづくり (考える会)
出店者	フリーマーケット出店者	× テーマ②	まちなかにおける地域コミュニティに関する活動
公共施設	道の駅	○ テーマ③	フリーマーケット開催
公共店	公共空間としての性質を持つ飲食店	○ テーマ⑤	食育活動
店	店舗出店者	○ 福祉②	オヒサマの森などの福祉施設・飲食店運営
企業	企業	× 公共店①	まちなかのコミュニティスペース (MIYADA村人TERRACE)
蔵	蔵保有者	× 公共店②	オヒサマの森内飲食店
個人	個人の関係者	× 大学	景観分野の研究・調査 (早稲田大学景観・デザイン研究室)
大学	大学研究室		

4.1 主体の活動から見た構造の分析

主体の活動から見た構造に関して、k-core 値が高い要素は、主体は役場機関や蔵、大学、考える会を含むテーマ型組織であり、場所はまちなかにあたる町割 (町 1 区~3 区) や新田区、中越区である。次いで、主体は福祉関係店舗 (福祉④)、企業、友好都市の道の駅 (公共施設①)、個人 (個人①)、場所は大原区や伊那市・駒ヶ根市、県外やインターネットなどその他の場所の値が高い。

リンクの入出数から中心性を見ると (次数中心性), k-core で高い数値を示したものが中心であり、特に主体はテーマ型組織 (テーマ①: 考える会, ②, ③)、場所は町 2 区と新田区、次いで町 1, 3 区が中心となっている。また、実行委員会に属する福祉関係主体 (福祉②) は、k-core の値が低い一方で次数中心性は高くなっている。

ネットワークのなかで他の要素の経由点となり、その存在が消えるとネットワークが分断されるような要素は媒介性中心性が高いとされており、考える会 (テーマ①)、実行委員会に属する福祉関係主体 (福祉②)、テーマ型組織 (テーマ②) などの主体の中心性が高い。場所に関しては次数中心性同様に、町 2 区と新田区が中心となっている。

4.2 モノを介して見た構造の分析

モノを介して見た構造に関して、k-core 値が高い要素は、主体は役場機関や蔵、大学、考える会、考える会と関わりの深い店舗 (店⑤) であり、場所は町割や中越区、伊那市・駒ヶ根市、県外やインターネットなどその他の場所である。次いで、実行委員会に属する福祉関係主体 (福祉②)、大原区、新田区、長野県内の他市町村の値が高い。加えて、主体と場所間では公共空間としての性質を持つ飲食店 (公共店①, ②) と一部出店者の値が高い。

次数中心性を見ると、k-core で高い数値を示したものが中心となっており、特に役場機関 (役場①) と実行委員会に属する福祉関係主体 (福祉②) の中心性が高い。次いで、考える会 (テーマ①) や公共空間としての性質を持つ飲食店 (公共店①) の中心性が高い。考える会を除くテーマ型組織は k-core で高い数値を示した一方、次数中心性は低い。

媒介中心性が高い主体は福祉関係主体 (福祉②, ④)、公共空間としての性質を持つ飲食店 (公共店①, ②)、役場機関 (役場①) で、場所は町 1 区、町 2 区が中心である。

主体と場所間では次数中心性・媒介中心性において実行委員会に属するテーマ型組織 (テーマ⑤) の値も高い。

5. 構造と実態から見た宮田市におけるきょうどう

5.1 主体の活動とモノから見た社会的・空間的関係の構造比較

本節では、4 章に示した主体の活動とモノの 2 つの観点から見た宮田市における社会的・空間的関係の構造を比較し、その共通点や相違点から宮田市における社会的・空間的関係の構造について考察する。

(1) 主体の活動とモノから見た構造の共通点

主体の活動とモノの結果ともに k-core では役場機関や蔵、大学、考える会などの主体と町割・中越区の値が最も高く、大原区、伊那市・駒ヶ根市、県外やインターネットなどその他の場所の値も高い。つづいけ丘区はリンクを持たないノードとなっている。

主体の活動とモノの結果ともに、次数中心性を見ると k-core で高い数値を示したものと福祉関係主体 (福祉②) が中心となっており、媒介中心性から見ると、主体は福祉関係主体 (福祉②)、場所は町 2 区が中心となっている。

(2) 主体の活動とモノから見た構造の相違点

主体の活動と比べてモノの結果の方が入出次数が大きく、k-core で見るとモノの結果の方が主体の活動より数値が高く出ており、主体間・場所間の結果では 5 以上のリンクを持つ部分ネットワーク (5-core, 6-core) が現れている。また、実行委員会に属する福祉関係主体 (福祉②) はモノの結果の方が高い値となり、考える会を除くテーマ型組織や企業は全般に主体の活動の結果の方が高い値となっている。

次数中心性を見ると、モノの結果では公共空間としての性質を持つ飲食店 (公共店①) が高い値となっている。テーマ型組織では主体の活動の結果の方が高い値となる傾向がある。

媒介中心性を見ると、公共空間としての性質を持つ飲食店 (公共店①, ②) はモノの結果の方が高い値となり、一方でテーマ型組織 (テーマ②, ③)、考える会では主体の活動の結果の方が高い値となっている。また、主体と場所間では、実行委員会に属するテーマ型組織 (テーマ⑤) はモノの結果の方が高い値となっている。

その他に主体の活動とモノの結果で異なる構造として、企業の関係が挙げられる。企業①, ②は主体の活動では同

様な位置づけにあるが、モノの結果では企業②の方が他の主体や場所との関わりを多く持つ結果となっている。

(3) 考察

k-core に着目すると、主体の活動とモノの結果ともに役場機関や蔵、大学、考える会などが緊密に連携しあう重要な主体であることが伺える。また、まちなかにあたる町割や中越区を拠点に緊密な関係が生じ、大原区、伊那市・駒ヶ根市、県外やインターネットなどその他の場所も中心となっている一方、つつじヶ丘区では関係が見られない。これは、例えば中越区を拠点とするテーマ型組織やまちなかに施設を持つ福祉関係主体の参加などのような関係主体の活動拠点が現れ、伊那市・駒ヶ根市やインターネットなどの日常購買圏が反映された結果であると考えられる。モノの結果の方がk-coreの値が高いことは、モノを介したやり取りが多く行われており中心的な主体・場所間の緊密な関係がより反映された結果であると考えられる。主体の活動とモノの結果において福祉関係主体（福祉②）とテーマ型組織のk-core値が異なることに関しては、福祉関係主体は活動拠点以外とモノを介して緩やかにつながっており、テーマ型組織は宮田市内も含めて他主体と積極的に連携しているという主体の性質によるものではないかと考えられる。福祉関係主体（福祉②）は次数中心性と媒介中心性から見ても中心となっており、ハブとしての役割を果たしている。

次数中心性と媒介中心性を見ると、モノの結果において公共空間としての性質を持つ飲食店が中心となっていることが分かる。このような飲食店は地場産品やテーマ型組織の広告などを置いており、モノを介した緩やかな関係の中心となっている。また、実行委員会に属するテーマ型組織のうち、テーマ⑤はk-coreの値は低いモノの結果において主体と場所間での媒介中心性が高い。これはこの主体が役場機関と協働し出店するにあたり地産地消をテーマに外部の主体と連携し、上伊那地域を跨いで食材などを調達したことによるものであると考えられる。

企業の構造が異なったことは、酒造関係の関連企業において、地域に密着した企業の商品が飲食店などで扱われていることによる。

主体の活動とモノの結果の相違点を見ると、モノの結果では緩やかなつながりの場や地場産品など地域に由来する食材によるつながりが見える結果になったと考えられる。

5.2 モノを介した関係と場を介したきょうどうの実態

本節では、モノに関する調査を通して関係主体から得られた発言や宮田市において現地で観察されたことをもとに、主体の意図や詳細な関係などの実態から宮田市という場を介したきょうどうについて考察する。

(1) モノの調達に係る行為及び財・サービス区分によるモノの種類別に見た関係

モノの調査結果から、購入、保有/日常使用品の持ち出し、借用などモノの調達に係る行為及び財・サービス区分²⁹⁾によるモノの種類別に関係を見る。消費の対象となる財とサービスの分類において、財はその耐久性によって機械などの耐久財・衣服などの半耐久財・食品などの非耐久財に分けられる²⁹⁾。

購入による関係に着目すると、地産地消や他の宮田市関係主体との連携を意図して、宮田村内や上伊那地域において食材が調達されていた。その他の非耐久財に関しては伊那市・駒ヶ根市内の店舗を中心とした購入が見られた。特に包装資材に関しては伊那市の業務用スーパーマーケットの利用が多いなど、購入先が集中していた。保有/日常使用品の持ち出しはどの主体においても見られ、車や椅子など運搬・設営に係る耐久財や商品提供のための備品などの耐久財・非耐久財であった。借用に関しては、実行委員会などの中心的な主体において車やテント・椅子・机などの運搬・設営に係る耐久財や展示準備に用いるライトなどの耐久財及び文房具などの半耐久財が見られた。

モノの調達から見た地図上の関係を図12に示す。

(2) モノを介して見る宮田市におけるきょうどう

・ 中心的主体のモノを介した関係と役割

役場機関（役場①）に着目すると、テントや机・椅子などの耐久財の貸し出しという役割を果たしている。役場機関がテーマ型組織（テーマ⑤）と一緒に出店するにあたり、テントや机・椅子などを共有したほか、「小雨の影響により出したテントを近くの路上出店者に使ってもらった」という発言が得られた。したがって、役場機関とモノを介した関係には、行政と住民が日常的に協働する関係性の反映及びその場を介し目的のために協力する共同としての協力が入り混じる、きょうどうの関係が見られたと捉えられる。

考える会の催し物に着目すると、考える会が文房具などの資材を貸し出し、歴史・文化発信のための展示物、のぼり旗などを設置した。事業展開に伴い保有する資材及び教育委員会（役場②）や大学との協働による制作物の活用がなされていた。また、展示物や交通止めのため設置した看板は複数の主体が保管場所を提供し、まちなかの保管場所不足という課題に対し共同する様子が見られた。

オヒサマの森内フリーマーケットエリアに着目すると、各出店者はフリーマーケット出店にあたり洋服やクラフト品などの半耐久財を購入・持ち出ししており、実行委員会の担当者である福祉関係主体（福祉②）が各出店者に机・椅子を貸していた。役割分担しフリーマーケットを開催する共同の関係性が、宮田市にも持ち込まれている。フリーマーケットなどの個人参加者に関しては考える会では把握しておらず、このようなテーマ型組織が個人参加者との媒介となり、宮田市への参加の輪を広げ気軽に参加できるイベントとしての特徴をつくっていると考えられる。

歩行者天国実施空間における出店者同士での関わりは少ないが、宮田市も含めたイベントで一緒になることがある。

以上の結果より、中心的主体のモノを介した関係と役割を図13に示す。宮田市においては事業や主体の活動としての協働と宮田市成功のため目的を共有する共同がともに見られ、役場機関の関係者が村の住人であることから協働と共同の入り混じるきょうどうの関係が見られる。

・ 宮田市の取り組みを通じた主体間の変化

考える会代表によると、宮田市開始頃と比べて考える会との連携に変化が生じた主体として、蔵保有者がある。以前よりガイドツアーで紹介するにあたり協力を得ていたが、

第5回宮田市では展示に伴い準備作業なども含めたより強い共同関係へと変化した。また、テーマ型組織（テーマ②）は1年程前からまちなかの地域コミュニティに関する活動をはじめており、公共空間としての性質を持つ飲食店である公共店①を中心に活動している。テーマ②の代表によると、はじめて宮田市において活動するにあたり、宮田市へ参加して欲しいと思う主体に声をかけて参加を呼びかけ、宮田市以降も組織の活動に参加してもらうようになったとしている。このことから、蔵の展示や公共空間としての性質を持つ飲食店である公共店①における出店・展示は、第5回宮田市において新たな取り組みとして実施されており、その影響によってきょうどうの強化や新たな主体の参加といった主体間の関係の変化が生じたことが考えられる。新たな主体の参加が宮田市外での共同につながるとは限らないが、継続的な関係へと変化した例が見られたと言える。

5.3 考察

本節では、5.1 と 5.2 より宮田市について調査・分析により得られた構造とその実態を照らしあわせて考察する。

主体と場所に関して見た構造及び関係の実態ともに、中心主体における緊密なきょうどうが見られる。主体の活動から関係を見ると、テーマ型組織の連携など活動の連携を捉えることができる一方で、モノを介した関係を見ると、準備に係る主体の動きからは見えづらい、緩やかな関係性や中心性が見えると考えられる。また、モノを介した関係からは、地産地消をテーマとした関係や地域のひろがりをつかえることができる。

例えば、モノに着目すると、公共空間としての性質を持つ飲食店が有するモノが集まる緩やかな中心としての機能が見える。MIYADA 村人 TERRACE ではテーマ型組織など地域の主体の活動を PR する広告が置かれ、地元のビールやジュースなどの商品が置かれている。このようなモノが集まる場所は地域の主体や商品の存在を感じさせる場所としてのポテンシャルを有している。新たな取り組みによりこのような場の活用がはじまっており、地域の主体が自らの経験や考えをもとに場のポテンシャルを見出し活用しようとしていることが伺える。

また、モノに着目して見ると、宮田市において福祉関係主体がハブとしての役割を果たしていること、イベントの会場となるなど公共空間としての性質を持つ飲食店などにおいて募金箱やチラシが置かれており、緩やかな関係を持っていることが分かった。他組織と積極的に連携を図るテーマ型組織と比べてほかの主体とのつながりが見えづらいが、宮田市内外で緩やかな関係を築いていることが分かる。地産地消をテーマとしたつながりに関しては、宮田村の他の主体や宮田村の農作物を取り入れるほか、上伊那地域を意識した食材や商品が用いられている。また、日常購買圏として周辺市町村を含めた商業店舗やインターネットの利用が反映されているほか、友好都市の道の駅が出店し他の出店主体からモノの提供を受けるなど宮田村の地域としてのひろがりが見られる。

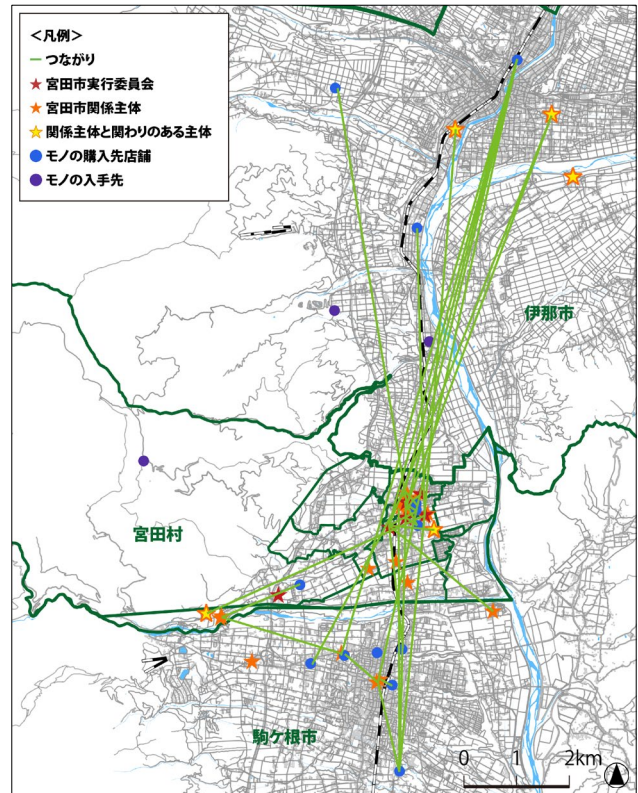


図 12. モノの調達から見た宮田村周辺における関係

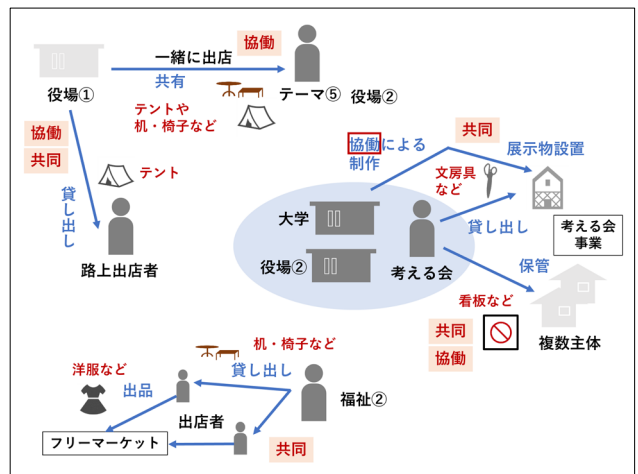


図 13. 中心的主体のモノを介した関係と役割

6. 本研究のまとめと今後の課題

6.1 本研究のまとめ

(1) 各章のまとめ

本研究では、第5回宮田市において主体の活動とモノの2つの観点から主体と場所のつながりを調べる調査を行った。社会ネットワーク分析により社会的・空間的關係の構造を明らかにし、以下の結果が得られた。

- ・主体に関しては、役場機関や蔵、大学、考える会、場所に関しては町割を中心に関係が緊密である。

- ・大原区、伊那市・駒ヶ根市・インターネットなどその他の場所を中心として、主体と他の場所がつながっている。一方、つつじヶ丘区とのつながりが存在していない。これは主体の活動拠点と日常購買圏が反映された結果であると考えられる。
- ・緊密な関係を形づくる主体ではないが、他の主体との媒介となる主体として福祉関係主体の存在が見られる。
- ・以上の結果より、宮田市における中心的な主体として緊密に関わりあう主体と他主体とのハブとなる主体の存在が明らかになり、関係性は主体の活動・モノの結果ともに日常的な活動が反映されていると分かった。

また、主体の活動とモノの2つの観点から見た構造の比較から、以下の知見が得られた。

- ・主体の活動よりモノを介したつながりの方が多く、これは、中心的な主体・場所間の緊密な関係がより反映された結果であると考えられる。
- ・主体の活動とモノでは一部の主体で密度が異なる結果となった。これは他主体と積極的に連携するテーマ型組織やモノを介した緩やかなつながりを持つ福祉関係主体など、主体の性質による違いであると考えられる。
- ・公共空間としての性質を持つ飲食店が、モノの結果ではつながりの数と他との媒介性において中心となっている。これは、公共空間としての性質を持つ飲食店が、モノが集まる緩やかなつながりの場となっていると考えられる。
- ・実行委員会に属するテーマ型組織は、緊密な関係を形づくる主体ではないがモノの結果において他の主体との媒介となっている。これはこの主体が地産地消をテーマに外部の主体と連携し、食材などを調達したことによるものであると考えられる。
- ・企業に関して、主体の活動とモノの結果において他主体との関わりにおける位置づけの違いが見られる。これは、酒造関係の関連企業において、地域に密着した企業の商品が飲食店などで扱われていることによる。
- ・以上の結果より、モノを介して見ることにより、主体の活動からは見えない緩やかな関係性や地場産品など地域に由来する食材によるつながりが捉えられることが示唆される。

宮田市におけるモノを介した関係ときょうどうの実態から、以下の知見が得られた。

- ・地産地消や宮田市関係主体間での連携を意識した食材の購入が見られる。また、伊那市・駒ヶ根市を中心にスーパーマーケットなどの店舗において非耐久財が購入され、購入先の特定店舗への集中が見られる。
- ・どの主体においても運搬・設営に係る耐久財や商品提供のための備品などの耐久財・非耐久財の持ち出しがある。
- ・実行委員会などの中心的な主体において運搬・設営に係る耐久財や展示準備に用いる耐久財・半耐久財が借用されている。モノを介した関係としてその場での共同を含むきょうどうが見られる。
- ・宮田市における取り組みを介して主体間の関係に変化が生じている。特に新たな取り組みである蔵の展示やまち

なかで活動しはじめたテーマ型組織を介した変化が生じている。宮田市内外における主体の関係に関して、宮田市の影響が見られている。

宮田市における主体間の関係の構造と実態から、宮田市について以下の考察が得られた。

- ・主体の活動からテーマ型組織の連携など活動の連携を捉えることができる。
- ・モノに着目すると緩やかな関係性や中心性が見られる。公共空間としての性質を持つ飲食店や福祉関係主体が緩やかな関係性・中心性を持っている。
- ・モノに着目すると、地産地消をテーマとした関係や地域のひろがり捉えることができる。

(2) 本研究で得られた知見と考察

宮田市は、まちなかの魅力を再確認しきょうどうを図る狙いをもとに歴史・文化の発信などを含む複合的な定期市事業として行われている。このような事業の狙いと性質に対して、主体の活動とモノに関する調査を通して分かったことと考えられることを整理する。

・多様なテーマと地域との関わり

宮田市に内包されるテーマとして景観、歴史・文化、まちづくり、地域コミュニティ、地域活性化、福祉、子ども、地産地消、音楽、フリーマーケットなどが挙げられる。宮田市は単なる定期市や地域活性化のイベントではなく、まちなかを中心とし宮田村全体・地域の住民に関わる場として実施されていると言える。

モノを通した調査から、食材や資材の購入に関わる地域の日常生活圏と、地産地消や地域の特徴が見える。前者に関しては上伊那地域において隣接市町村である伊那市・駒ヶ根市を中心としたスーパーマーケットなどの利用とインターネットや問屋などの利用という傾向が得られた。後者に関しては、地産地消を念頭に置いた食材の入手が見られたほか、酒造関連企業のうち宮田村に根付いた企業との関係が強いという結果が得られた。

宮田村は上伊那地域に位置し、伊那谷の特徴を有する地域としての連関と宮田村特有の魅力がある。このような宮田村という地域のまちなかにおいて、宮田市が内包する多様なテーマと地域の特徴が示されたと考えられる。

・まちなかを介したきょうどうと新たな主体の参加

関係の構造からも、役場機関や考える会などの実行委員会とまちなかを中心としたきょうどうが確認された。宮田市におけるきょうどうを図る狙いとまちなかの賑わい創出という目的は一定程度達成されていると考えられる。

宮田市の催し物は大きく考える会の行う事業、フリーマーケット・マルシェ、道路空間上の出店に分かれる。考える会の事業には役場機関や大学が関わり、協働・共同ともに緊密な関係となっている。新たな蔵に関わる催し物の企画により、蔵保有者との関係もより緊密なものとなった。フリーマーケット・マルシェはテーマ型組織が実行委員会として企画・運営し、個々の主体が参加し出店のために役割を分担する共同の様子が見られる。また、道路空間上の出店は場を共有することによりその場での共同が生じている。イベントはテーマ型組織が媒介となり、他の主体を呼

び込んでいる。したがって、宮田市は中心主体がきょうどうしつながらあ、フリーマーケットやテーマ型組織が新たな参加の媒介となっており、目的を共有し運営がなされ、新たな参加を取り入れる場となっていると言える。

宮田村におけるきょうどうを考えると、役場の人も顔見知りの住民であり、協働と共同が入り混じるといった関係性が伺える。まちなかに地域の主体が集まる場として開催することで、様々な意図を持って活動する主体が一つのイベントを形づくるために共同し、まちづくりに携わる人の協働が貢献するという形が見られると考えられる。

また、宮田市の狙いにはまちなかの福祉関係主体との交流があり、福祉関係主体が道路空間上に出店することで認知の機会が増えることが意図されている。モノに着目すると、宮田市において福祉関係主体がハブとしての役割を果たしていること、宮田市内外で緩やかな関係を築いていることが分かり、福祉の面での効果も考えることができる。

6.2 今後の課題

本研究では宮田市の場における関係をモノに着目することにより切り取り、社会ネットワーク分析を行った。結果より、モノを介した関係を捉えることで、地産地消のテーマや日常購買圏のような地域における生活と特性が反映された関係及び中心性や緩やかなつながりが強調された関係が捉えられると考えられる。

既存の社会ネットワーク分析には個人間の関係（パーソナルネットワーク）を把握するものや変化を比較するものがあり、各々の方法にあった詳細な構造を見ることができると考えられる。宮田市においても既存の社会ネットワーク分析を用いることにより、顔見知りの関係などによる構造を捉えることができると考えられる。

<参考文献>

- 1) 田中逸郎：NPO と自治会など地縁型団体の協働による地域コミュニティ再構築の諸要件，コミュニティ政策 5 巻，pp.98-120, 2007.
- 2) 全国町村会：町村における地域運営組織，平成 29 年 4 月
- 3) 羽貝正美編著：自治と参加・協働—ローカルガバナンスの再構築，学芸出版社，2007.
- 4) 中村良夫，鳥越浩之，早稲田大学公共政策研究所：風景とローカルガバナンス 春の小川はなぜ失われたのか，株式会社早稲田大学出版部，pp.93-136, 2014.
- 5) 大垣直明，谷口尚弘：ちょうちん制作を媒介としたまちづくり活動の継続性と評価—「手稲夏あかり」の 10 年間の活動を通して—，日本建築学会計画系論文集，第 564 号，pp.227-234, 2003.
- 6) 藤本真里，赤澤宏樹，鳴海邦碩，中瀬勲：兵庫県立有馬富士公園における住民グループの主体的活動とその継続の要因に関する研究，ランドスケープ研究，71 巻，5 号，pp.811-816, 2008.
- 7) 藤倉英世，山田圭二郎，羽貝正美：地域景観と地域社会の相関構造及び景観の内的システムの生成・発現に関する実証的研究，土木学会論文集 D, Vol.66, No.3, pp.394-413, 2010.
- 8) ブリュノ・ラトゥール（原著），伊藤嘉高（訳）：社会的な

- のを組みなおす アクターネットワーク理論入門，法政大学出版局，2019.
- 9) 新建築 住宅特集 2016 年 11 月号／第 367 号，株式会社新建築社，2016.
能作文徳：「もの」と人の連関を再縫合する建築へ，pp.10-13
能作文徳，能作享平：高岡のゲストハウス，pp.14-23
 - 10) 水野優子，栗山尚子，三輪康一，末包伸吾，安田丑作：まちづくり組織間の連携にもとづく地域運営組織の実態とその課題に関する研究—神戸市を事例として—，都市計画論文集，Vol.52, No.3, pp.998-1005, 2017.
 - 11) 北野幸樹，野田りさ：活動内容の特性と活動組織の意識からみた千葉県の NPO 法人におけるまちづくり活動の動向と持続性について—地域主体のまちづくり活動における連関性と持続性に関する研究—，日本建築学会計画系論文集，第 83 巻，第 745 号，pp.465-473, 2018.
 - 12) 藏田夏美，後藤春彦，吉江俊：首都圏における趣味の手作りクラフト市場を構成する場の体系と参加者の活動実態—複数の展示即売会でのヒアリング調査を通して—，日本建築学会計画系論文集，第 83 巻，第 743 号，pp.33-43, 2018.
 - 13) 朝倉真一，野嶋政和：地域活性化を目的とした社寺境内地におけるフリーマーケットの特性と課題に関する研究，ランドスケープ研究，66 巻，5 号，pp.789-794, 2003.
 - 14) 中内和，山田圭二郎，川崎雅史：下北沢の商業系街路空間を巡る地域的ルール形成に関する研究，土木学会論文集 D1（景観・デザイン），Vol.71, No.1, pp.116-132, 2015.
 - 15) 高橋正也，比屋根哲，林雅秀：社会ネットワーク分析による農山村集落の今後を担うリーダーの構造：岩手県西和賀町 S 集落の事例，林業経済研究，55 巻，2 号，pp.33-43, 2009.
 - 16) 萩原和，星野敏，橋本禪，九鬼康彰：住民自治意識のネットワーク構造が組織間信頼に与える影響—岐阜県恵那市恵南地域のまちづくり実行組織を事例として—，環境情報科学論文集，Vol.25, pp.155-160, 2011.
 - 17) 吉野馨子，片山千栄，諸藤享子：住民による農産物の入手と利用からみた地域内自給の実態把握—長野県飯田市の事例調査から—，農林業問題研究，44 巻，3 号，pp.449-460, 2008.
 - 18) 中里裕美，大槻知史，鐘ヶ江秀信：人間関係構築手段としての地域通貨システムに関する研究—スウェーデンの LETS を事例として—，地域学研究，35 巻，3 号，pp.719-736, 2005.
 - 19) 宮田村公式サイト，地勢・面積・所在地など
https://www.vill.miyada.nagano.jp/government/pages/root/profile_miyada/10909（最終閲覧日：2019/1/7）
 - 20) 宮田村公式サイト，人口・世帯数
<https://www.vill.miyada.nagano.jp/government/pages/root/archive/population/H31>（最終閲覧日：2019/1/7）
 - 21) 長野県宮田村：宮田村景観計画，平成 29 年 4 月
 - 22) 宮田村の景観を考える会，趣旨
<https://miyadanya.jimdo.com/%E8%B6%A3%E6%97%A8/>（最終閲覧日：2019/1/7）
 - 23) 安田雪：実践ネットワーク分析—関係を解く理論と技法—，株式会社新曜社，2001.
 - 24) MIYADA 村人 TERRACE
<https://miyaterrace.jp/>（最終閲覧日：2020/1/22）
 - 25) 総務省統計局，平成 26 年全国消費実態調査—用語の解説付録，収支項目分類表（財・サービス区分の分類内容）
<https://www.stat.go.jp/data/zensho/2014/furoku.html>（最終閲覧日：2019/1/21）